

ICFの視点を用いた

レクリエーション支援に関する研究 (2)

～本学の介護実習を中心に～

A study of the recreation support focusing on ICF

～A focus of the care training of Aichi Shinshiro Otani University～

岡本 淨実 (愛知新城大谷大学社会福祉学部)

熊崎 百代 (名古屋女子大学)

1 研究目的

団塊の世代の高齢化・格差社会など新たな社会問題を抱えるなか社会福祉士・介護福祉士法改正が進められている。介護福祉士は、「専門的知識・技術をもって、心身の状況に応じた介護等を行うことを業とする者」と見直される人材を育成のために介護福祉士養成課程も新カリキュラムが実施される。現行の15科目が統合され「人間と社会」「こころとからだのしくみ」「介護」の3つの柱で構成される。科目の統合により「レクリエーション活動援助法」という科目は姿を消す方向で検討されているが、人間の生活に「生きがい」や「楽しみ」がなくなることではないと考える。今後は、レクリエーション活動という手段が「社会とどう関わるか」、「こころとからだにどんな効果があるか」、「介護をどう支えるか」をひとつひとつ検証していかなければならない。とくに「介護」は、(1) 介護技術と (①介護概論、②コミュニケーション技術、③生活援助技術、④介護過程)、

(2) 実習で構成されている。注目すべき点は、

ICF [国際生活機能分類 (International Classification of Functioning Disability and Health¹⁾)] にもとづく利用者のアセスメントから介護過程が展開されていくことである。介護福祉士養成課程の中で「介護の目的を達成するための手段であり、学生ひとりひとりがもつ思いを表現するいわば道具である²⁾」と指摘されているように「こんな援助がしたい」という思いを表現する手段である。この手段に大きな変化があることは養成課程に関わる教員の教授方法の開発が急務である。同時に実習施設との実習内容の説明等課題が山積される。

先行研究では、介護実習における個別援助計画において利用者の生活を支える視点から「したい活動」だけでなく「している活動」の可能性を引き出すためにICFの視点を活用することは有効な手段であることを明らかにした。本研究では、介護福祉士養成課程の集大成である介護実習に今後の養成課程の重要な要素であるICFの視点を用いた情報整理の導入を試みた。また、生活援助技術

としてのレクリエーション援助の課題を明らかにすることを目的としている。

2. 研究方法

(1) 調査対象

①介護実習第3段階介護実習記録

A大学介護福祉学科2年22名（在籍32名、68.8%）

②アセスメントシートに関する調査

A大学介護福祉学科2年26名（在籍32名、81.3%）

(2) 研究期間および方法

①介護実習第3段階は、平成19年10月15日～11

月9日の4週間実施された。分析資料は、実習記録「フェイスマシート」「生活ニーズのアセスメント」「日常生活動作のアセスメント」

「情報整理」「個別援助計画」の5枚を分析対象とした。実習終了後、11月16日のレクリエーション活動援助法授業時に研究の趣旨を説明し資料分析の協力を得た。

②ICFの視点を用いたアセスメントシートに関するアンケートを平成20年1月25日のレクリエーション活動援助法授業時に実施した。調査は、研究の趣旨を説明し協力を得た学生に対して実施した。

(3) 調査内容

①介護実習記録

フェイスマシート（利用者氏名・性別・年齢・要介護度・日常生活に影響がある疾病など・医師からの指示・身体的な障害・知的障害・施設生活の状況・介護に関わるキーパーソン・利用者の嗜好）、生活のニーズのアセスメント（生活暦・現在の生活状況と施設で

の生活に対する要望）、日常生活動作のアセスメント（起居動作・体位変換・着脱衣・移乗・移動・整容動作・食事・排泄・入浴・生活）、情報整理（本学で導入したICFの視点を用いた情報整理シート³⁾は、諏訪さゆり、大瀧清作の著書「ケアプランに活かすICFの視点」から「ケアプラン立ち上げシート」をモデルとし介護実習用に作成、個別援助計画（長期目標・短期目標・介護実践・評価（実践した結果と考察））

②ICFの視点を用いたアセスメントシートに関するアンケート

介護実習記録の関連・介護実習第2段階の導入・介護実習第3段階の導入・レクリエーション援助・学生の休及び平日の余暇時間

3. 結果

(1) 介護実習記録

個別援助計画を作成し介護実践を行うプロセスは、学生が介護福祉士として現場で活動するための礎となる過程である。過去3年間（平成16年度49名在籍中46名、平成17年度45名在籍39名、平成18年度42名在籍中41名、合計136名在籍中126名92.6%）の第3期介護実習の個別援助計画（介護実践）を整理・分析を比較した^{4) 5) 6)}。平成16年度～19年度までの個別援助計画（介護実践）を図1.に示した。平成19年度の個別援助計画で選定した対象は、高齢者施設22ケース（81.5%）、障害者施設5ケース（18.5%）である。フェイスマシートから性別は、男性2ケース（7.4%）、女性25ケース（92.6%）であった。今回は、高齢者施設の22ケースを中心に分析する。介護度は、図2.に示すように要介護度3がもつとも多かった。また、生活ニーズのアセスメントには、対象者のニーズ（～したい・望まれている等）が記録されて

いたケースは、14ケース (63.6%)、対象者のニーズが記録されていないケースが8ケース (36.4%)であった。対象者のニーズが記録されていないケースは、「反応がないため聞き取れなかった」「聞いても応えていただけなかった」「〜していたので〜したいと推測される」等と記録されていた。

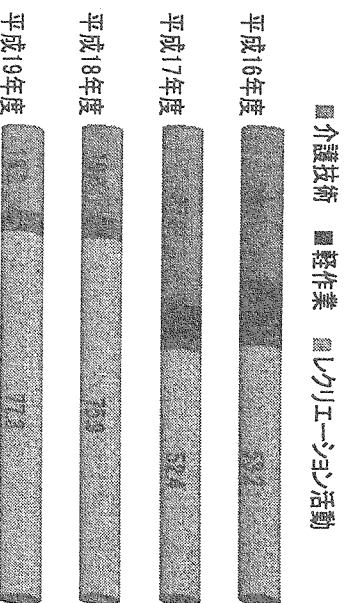


図1. 個別援助計画の介護実践

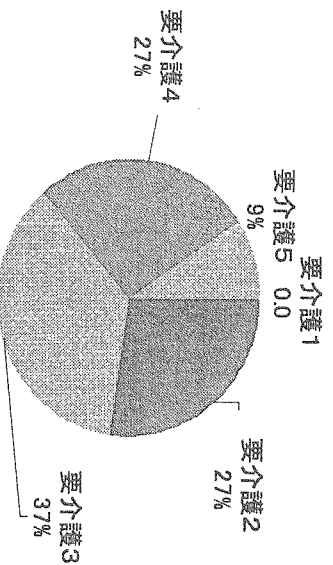


図2. 対象者の介護度 (高齢者施設 22名)

日常生活動作のアセスメントでは、図3. に示すように3つのパターンに分類された。まず、対象者の状況記述 (「自立している」「一部介助が必要」等) が15ケース (68.2%) で最も多かった。次に対象者の状況に加えて時間と環境の記述 (「昼は職員の介助でトイレまで移動し排泄するが、夜は自室のポータブルトイレを使用している」「柵を利用しゆっくりと座位をとれる」等) 3ケース (13.6%) であった。対象者の状況に加え時

間・環境対象者の様子が記述 (「尿意が知らされると職員は、手引き歩行でトイレに誘導する。対象者は、手すりを利用し便座に座りトイレットペーパーを渡しカーテンを閉める。排泄が終わると「終わったよ」と声をかけてくれる」等) が4ケース (18.2%) であった。情報整理では、フェイシート・生活ニーズのアセスメント・日常生活動作のアセスメント (以下：前段階のアセスメント) の情報を活用できているケースは、10ケース (45.6%) であった。残りの12ケース (54.6%) は、前段階のアセスメントシートにない情報を用いて情報を整理していた。前段階のアセスメントシートの情報を活用していた10ケースのうち6ケース (60.0%) が生活ニーズのアセスメントから「〜したい」という対象者の願いに注目していた。

個別援助計画では、図4.に示すように15ケース

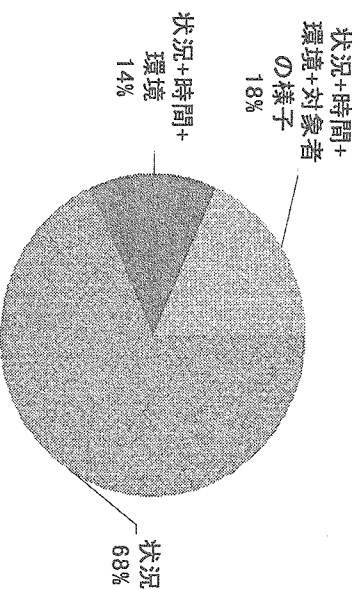


図3. 日常生活動作のアセスメントシートの記述分類 (高齢者施設 22名)

(68.2%) が「楽しみ」「余暇」に関する長期目標を立てていた。また、レクリエーション活動を介護実践に活動していたケースは、17ケース (77.3%) であった。このうち6ケース (35.3%) は、対象者の生活のニーズのアセスメントから導いているが、10ケース (45.6%) は介護実践に用いたレクリエーション活動の説明や理由付けが記述されていなかった。1ケース (4.5%) は、「何か楽しいことをしたい」という利用者のニーズが

ら4種類のレクリエーション活動を提案している。しかし、4種類のレクリエーション活動を一通り提供し対象者の好みなどから2つに絞り込む段階で実習を終えた。

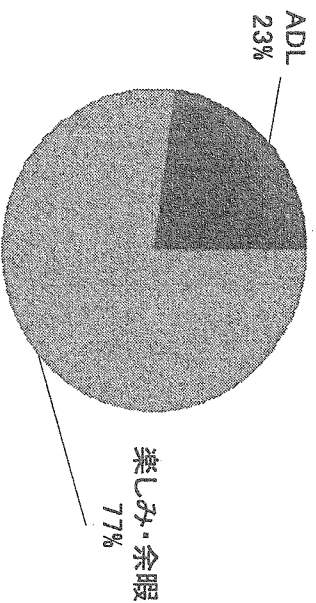


図4. 長期目標のキーワード
(高齢者施設 22名)

(2) ICFの視点を用いたアセスメントシートに関するアンケート

ICFを用いた情報整理シートに関するアンケートを26名(81.3%)を対象に行った。まず、「最も多く活用した情報は何か」という質問の結果を図5.に示した。日常生活動作のアセスメントは、まったく活用されていなかったことがわかった。次に「一番整理しやすかった項目は何ですか」では、心身機能・身体構造が12名(46.2%)で最も多かった。また、「最も整理が難しかった項目は何ですか」では、個人因子12名(46.2%)、環境6名(23.1%)、参加4名(15.4%)、活動3名(11.5%)の順であった。ICFを用いた情報整理シートに関する質問では、「促進因子と障害因子の両面を常に意識できた」「利用者を理解するためのイメージをしやすかった」の肯定的な意見は2名(7.7%)のみであった。ほとんどが、「記入する枠が小さい」「言葉の意味がわからない」「活動と参加が区別できない」「職員さんに質問しても具体的にわからないといわれた」「環境がわかりにくい」「情報を区別するときの基準がわからな

い」等否定的な意見がほとんどを占めていた。

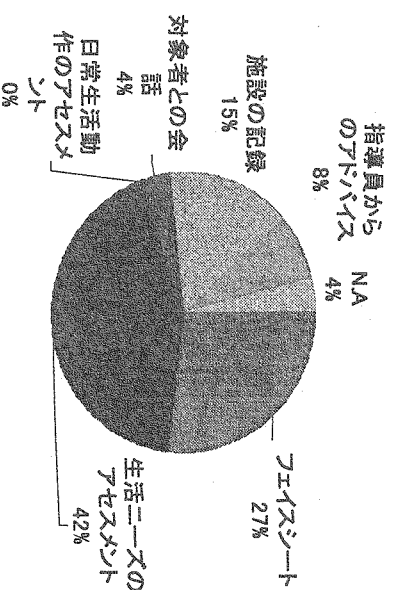


図5. ICFを用いた情報整理シートの記入に最も多く使用したシート

本学では、平成19年度介護実習第2段階からICFの視点を用いた介護実習記録を導入した。各段階における感想・意見を記述してもらったところ5月から6月に実施される介護実習第2段階までに学んでおきたかった内容として「アセスメントの方法」「福祉用具」「ICFの項目の理解」等があげられた。次に、介護実習第3段階までに学んでおきたかった内容は、「ICFの項目間の関連を事例をあげて説明してほしい」「アセスメント段階からICFをイメージするトレーニングをしたい」「ICFと個別援助計画との関係」等があげられた。

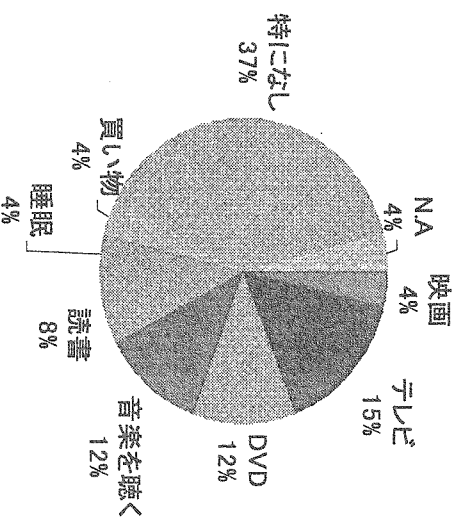


図6. 平日の余暇時間の活用
(N=26)

また、学生の余暇活動について質問した結果を図6. に示した。平日の余暇時間に行う活動が「特になし」と回答した学生が10名(38.5%)を占めていた。

4. 考察

対象者の生活ニーズのアセスメント(～したい・望まれている等)で集めた情報が多く活用されていることがわかった。しかし、ICFの情報整理に活用する際に「～したい・望まれている」という事実だけでなく着目し周辺の関わり(身体・参加・社会・環境・個人)などとの関連に着目できていないことが明らかになった。しかし、1ケースのみではあったが事前アセスメントシートの情報がICFの情報整理によって介護実践の選択肢を選定できた。しかし、日常生活動作のアセスメントでは、対象者の状況に注意が集まり日常生活動作を行っている「時間」「環境」「対象者の様子」等が見落とされていたことが明らかになった。さらに、日常生活動作のアセスメントを行ってもICFを用いた情報整理に活用されていないことが確認できた。また、個別援助計画では、レクリエーション活動を介護実践に活用していたケースが約8割であった。しかし、介護実践に活用した理由が明らかなケースが少なく援助者の提案型のレクリエーション活動であった。

5. まとめ

今回の調査では、B大学でも同様の調査を試みた。養成課程の年数が異なることや実習記録が大きく異なるため今回の報告からは除いた。

平成18年度に試みたICFの視点を用いた立ち上げシートを用いた介護実習事後指導では、「新たな課題を抽出できた」等一定の成果が得られた。

十分な準備ができていたとはいえない現状であったが、レクリエーション活動が個別援助計画で多く実践されていることから介護実習指導と連携を図ることができた。しかし、ICFの視点を用いたアセスメントについては多くの課題が山積している。しかし、利用者の生活を支える視点から「したい活動」だけではなく「している活動」の可能性を引き出すためにICFの視点は有効な手段と考える。

謝 辞

本研究は、財団法人日本レクリエーション協会平成19年度研究助成研究としてお認めいただいたことを感謝いたします。

研究の趣旨に賛同し「介護実習第3段階の個別援助計画」を提供いただきケースインタビューにご協力いただいた本学の介護福祉学科8期生に感謝いたします。また、介護実習施設指導者の皆さまには、ICFの視点を用いた情報整理シートの試みを見守っていただきました。お礼を申し上げます。とともに今後ともご指導・ご協力をお願いいたします。

注

- 1) 大川弥生：「生活や人生を「よくする介護」を～ICF(国際生活機能分類)を“共通言語に”」、*tabedas*, No.6, pp.10～15, 2005年
- 2) 熊崎百代：「介護実習における介護課程養成力の相関分析」、第11回介護教育学会抄録集、pp.90～91, 2004年
- 3) 岡本浄実・熊崎百代：「ICFの視点を用いたレクリエーション支援に関する研究～、*Leisure & Recreation* 第31号、pp.41～47, 2007年
- 4) 岡本浄実・熊崎百代・村上逸人・今泉雅博、個別援助計画におけるレクリエーション援助の現状と課題、愛知新城大谷大学研究紀要 No.2：pp.41～47, 2005
- 5) 岡本浄実・山下奈穂美・村上逸人・今泉雅博、個別援助計画におけるレクリエーション援助の現状と課題～第2報～、愛知新城大谷大学研究紀要 No.3：pp.61～73, 2007
- 6) 山下奈穂美・岡本浄実・村上逸人・今泉雅博：「個別援助計画におけるレクリエーション援助の現状～本学の第Ⅲ段階介護実習を中心に～、*Leisure & Recreation* 第31号、pp.3～12, 2007年